

世界の国を知る  世界の国から学ぶ

# わたしたちの地球と未来

■ 大リビア・アラブ社会主義人民  
ジャマーヒーリーヤ国 ■



## 【表紙の写真】

(左上) トリポリで出遭った子どもたち

 青柳直子

(右下) ムースック砂丘にテントを張る

 野口昌徳

# Contents

- 01 こんな想いを込めました!
- 02 こんな教材です!
- 03 なぜ大リビア・アラブ社会主義人民ジャマ-ヒーヤ国?

## 第1章 リビアってどんな国?

= 実はシャイではにかみや。浪漫とノスタルジーの国 =

- 05 リビアってどんな国?
- 07 リビアにまつわるウソ?ホント?
- 09 リビア歴史と世界遺産...浪漫の旅
- 13 フォトギャラリー ~トリポリの街角~

## 第2章 へえ~!リビアと日本

- 15 リビアと日本を比べてみたら...これってウソ?ホント?
- 17 フォトギャラリー ~砂漠は生きている~

## 第3章 一緒に考えよう!こんな課題

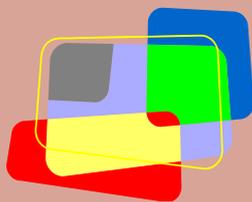
- 19 生まれ変わったリビア...そして新たな課題
- 20 参考資料 素顔のリビアを探して
- 24 フォトギャラリー ~リビアの人々 その1~
- 25 フォトギャラリー ~リビアの人々 その2~

## 第4章 そして未来へ

- 27 『多文化共生社会』ってどんな社会?
- 28 号外! 号外! 20年後の新聞です
- 29 多文化共生社会と地球的課題

## 参考資料

- 31 目で見るリビア
- 33 リビア地図
- 35 参考文献・データ等の出典
- 35 ご協力いただいた方たち
- 35 2008年度教材作成チーム



# こんな想いを込めました！

愛知万博で体験した国際交流の楽しさを広げていきたい！つなげていきたい！  
そんな想いが本書作成のきっかけでした。



## 国際交流は楽しい！

『世界大交流』をうたった2005年愛知万博。120カ国の文化や生活に触れたり、いろいろな国の人たちと話をしたりすることは、とても楽しい経験でした。「国際交流」は決して難しいことではありません。自分の視野を広げ、他者を尊重する力を育むことにもつながり、そうした力は多文化共生社会を実現するためにも欠かせません。そんな国際交流の楽しさ、大切さを愛知から発信していきたいと考えました。

## 人の顔が見える教材をつくりたい！

「日本ってこんな国」「日本人ってこんな人」って決めつけられて違和感を感じた経験はないでしょうか？ 国全体の概要を知ることもちろん大切ですが、何となく持っている固定概念をもしかしたら裏切るような、「へえ～、こんな一面もあるんだ」と意外に思えるような、そんな教材をつくりたいと考えました。そうすることによって、「わたしたちが世界のことをいかに知らないか」ということや「普段見聞きしている情報はほんの一面にすぎない」ということに気づいてもらうとともに、そこに住んでいる人々を身近に感じてもらえたらいいなと思います。

## 世界の国から学ぶ！

どんな国もいいところ、悪いところ、いろいろな面を持っています。何が幸せなのか、「豊か」の基準は何なのか、といった価値観もさまざまです。例えば、途上国だから「かわいそうな国」ではありませんし、紛争があるから「こわい国」でもありません。日本にもたくさん問題があります。様々な国の、特にすばらしいところを知ることによって、対等な関係をつくるとともに、自分たちの地域や生活をふりかえることができると考えました。国にも人にも文化にも優劣はないことを踏まえて、お互いに学び合える関係ができればいいなと思います。

## 未来を創るのはわたしたち！

地球はさまざまな課題を抱えています。環境や人権や平和など、日本も無関係ではありません。地球に住む一人ひとりがそれらの課題に取り組まなければ、よりよい未来を創ることはできないのです。そしてよりよい未来を創るためには、今、地球で起きていることは何なのかを知り、それが自分とつながっていることに気づくことが大切だと考えました。本書に掲載されていることは、地球で起きていることのほんの一部ですが、それらを通して感じたこと、気づいたことが未来につながっていくといいなと思います。



# こんな教材です！

次のようなことを考えて作りました。

## ファシリテーター・先生用の教材です

内容については、小学生高学年以上を対象としています。本書自体は、ファシリテーター(参加型プログラムの進行役)や先生に使っていただくための教材となっています。ことば遣いなど、対象に合わせて直してください。必要に応じてコピーし、配布していただいても結構です。

## 参加型で使うことができる教材です

情報・知識を聞くだけでなく、考えたり、作業をしたり、話し合ったりすることによって楽しく学べるとともに、その中で何かを感じたり、気づいたりしてもらえようようなプログラムにしました。基本的には4~6人のグループに分かれて行うプログラムになっています。必ずしも正解があるものばかりではありません。参加型のプロセスを大切にしてください。

## きっかけづくりの教材です

本書で紹介したのは、リビアのほんの一面です。本書だけでリビアのすべてがわかるわけではありません。リビアに親しみを感じ、関心をもってもらおうと同時に、自分たちの地域をふりかえり、地球的課題を考えるきっかけとして活用してください。

## 使い方は自由です

とはいうものの、使い方は自由です。もちろん、最初から順番にやる必要はありません。対象に応じてプログラムの進め方を変えたり、時間的な条件によって短縮したりするなど調整することもできます。参加者にあわせてどんどんアレンジして使ってください。巻末に参考資料を掲載していますので、最新のデータが必要なときや、もっと深めたいときは、活用してください。

## カラーデータ・写真はダウンロードできます

カラーデータ・写真については、(財)愛知県国際交流協会のホームページからダウンロードできます。ただし、著作権は出典元または(財)愛知県国際交流協会に帰属します。学校関係や国際交流団体等が教育の目的で非営利に使う場合に限り、活用していただけます。

## 本書の構成とマークの見方

基本的に、1項目2~4ページで掲載しており、実際に使っていただくプログラムと、それに関する説明とで構成されています。それぞれのプログラムの「ねらい」も記載していますので、参考にしてください。また、ページの下段に掲載している一口コラムは、プログラムとは関係なく、ちょっとおもしろい情報や用語の意味などです。必要に応じて活用してください。なお、本書で使っているマークの意味は次の通りです。



 参加型のプログラムです。必要に応じてコピーし、配布してください。	 プログラムで模造紙を使います。
 プログラムに関する説明です。ファシリテーター・先生用です。	 プログラムでマジックを使います。
 プログラムのねらいです。	 プログラムで付箋を使います。
 ちょっとブレイク一口コラムです。	 プログラムでA4用紙を使います。裏紙等を活用してください。
 プログラムに使う資料です。必要に応じてコピーし配布してください。	 データ等の出典です。
 コピーし、カード等に切り離して使ってください。	 写真の撮影者です。

# なぜ大リビア・アラブ社会主義人民 ジャマーヒリーヤ国？

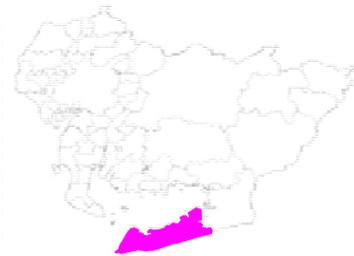
始まりは、2005年愛知万博「一市町村一国防レンドシップ事業」

2005年に開催された愛知万博の会期中愛知県内の市町村は、公式参加国120カ国(日本を除く)のホームシティ・ホームタウンとして、地域ぐるみのホスピタリティあふれる受入を行いました。この取り組みを「一市町村一国防レンドシップ事業」と言います。このフレンドシップ事業では次の5つのことをねらいとしました。

- 世界各地から訪れる人々に日本や日本人を理解してもらう
- 迎え入れる地域の人々に、交流を通じて、世界には多様な価値や文化があることを知ってもらう
- 万博会場内だけでなく、地域でもてなすことで、万博を相互交流を深めるための大きな舞台とする
- 地域文化を世界に発信することにより、各地域が自らの文化を再発見し、地域のあり方や発展の方向性について学ぶ機会とする
- 地域に根ざした「人」と「人」との交流を万博終了後も引き継ぎ、世界の人々をつなぐ架け橋としてさらに発展させる

この「一市町村一国防レンドシップ事業」をさらに広げ、つなげていこうと作成したのがこの教材です。

そして、大リビア・アラブ社会主義人民ジャマーヒリーヤ国のホームシティは、田原市でした。



- ：本教材
- ：2008年度教材作成の国
- ：2007年度教材作成の国
- ：愛知万博公式参加国

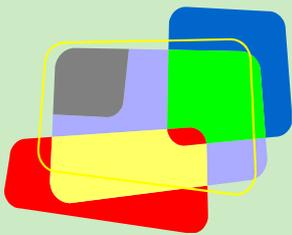
愛知万博 / アフリカ共同館

## ■ 第1章

### リビアってどんな国？

= 実はシャイではにかみや。

浪漫とノスタルジーの国 =



# リビアってどんな国？

① ところで、みなさんはリビアのこと、どのくらい知っていますか？  
次の写真の中で、リビアの写真はどれでしょう？

A



B



C



D



E



F



 E以外すべて野口昌徳 E:リビア政府観光局ウェブサイト



すべてリビアの写真です。

- A** 世界遺産にも登録されているアカクス山脈の玄関口アウィースにある岩アダー。トゥアレグ族のことばで「指の岩」という意味です。
- B** アカクス山脈のワンカサ砂丘。美しい風紋が現れています。
- C** ナールートからトリポリへ向かう途中。砂や岩ばかりの景色の中に、時々緑のある風景も見られるのです。
- D** 砂漠では、ラクダが放牧されています。
- E** リビアの首都トリポリ。トリポリ港近くの「緑の広場」から放射状に整然とした町並みが広がります。新市街は、道路も広く整備されていて、高層ビルや高級ホテルが建設されています。
- F** トリポリの旧市街(メディナ)。迷路のような裏街道には、オリーブ石鹸、香辛料、ナッツ類、お香、日用雑貨、仕立て屋、床屋、金細工などの店が所狭しと並んでいます。

## リビアってどんな国？

正式名は、大リビア・アラブ社会主義人民ジャマーヒーリーヤ国(アル=ジャマーヒーリーヤ・アル=アラビーヤ・アツ=リービーヤ・アツ=シャアビーヤ・アル=イシュティラーキーヤ・アル=ウズマー)。通称リビア。

北アフリカに位置し、地中海に面しています。国土の大部分がサハラ砂漠の一部で、面積のほとんどが砂漠。サハラ砂漠のリビアの部分を中心に、リビア砂漠と呼びます。海岸地域の気候は地中海性気候で温暖ですが、夏は乾季に、冬は雨季になり、年間を通して乾燥しています。内陸地域は、夏の昼間は猛暑に、冬の夜間は零下になるなど寒暖の差が激しい厳しい気候です。また、4月ごろには砂嵐が起こります。

リビアの歴史は、紀元前12世紀ごろ、フェニキア人の都市が栄えた頃にさかのぼります。その後、7世紀にアラブ人が、16世紀初めにトルコ人がそれぞれ進出し、オスマン=トルコ帝国の一部となりました。さらに、1911～1912年のイタリア・トルコ戦争の結果、リビアはイタリアの植民地となりました。第2次世界大戦中は、イギリス、フランスの占領下となりましたが、1951年、独立を果たしました。

1963年には憲法改正により連邦制を廃止とし、1969年に現カダフィ大佐率いる「自由将校団」が無血クーデターを成功させるなど、その体制によって、国名も変わっています。

- 1951年 - 1963年：リビア連合王国
- 1963年 - 1969年：リビア王国（連邦制廃止）
- 1969年 - 1977年：リビア・アラブ共和国（王制から共和制へ）
- 1977年 - 2004年：社会主義人民リビア・アラブ国（直接民主制に移行）
- 2004年 - ：大リビア・アラブ社会主義人民ジャマーヒーリーヤ国

国民の大多数がアラブ人でイスラム教徒です。

# リビアにまつわるウソ？ホント？

① 次のカードはリビアに関する「へえ〜!」情報です。これってホント？



① 「リビア」とは「海のかなたに降る雨」という意味である。



② リビアの国旗は他のアフリカの国の国旗と同じように、赤、緑、黄が使われている。



③ リビアの正式名称にある「ジャマーヒーリーヤ」とは「直接民主主義」のことである。



④ リビアの紙幣には1よりも小さい額がある。



⑤ リビアは国土の約90%が砂漠である。



⑥ リビアはアフリカで面積が一番広い国である。



⑦ リビアはアフリカの中で1番GDPが高い。つまり、お金持ち?!



⑧ リビアの水はしょっぱい!!



⑨ リビアでは20歳以上なら飲酒は法律で許可されている。





- 1 **ホント** ギリシャ神話に登場するポセイドンの妻リビュエに由来し、「海のかなたに降る雨」を意味します。砂漠の国リビアにとって、雨は天からの恵みなのです。
- 2 **×ウソ** リビアの国旗は緑一色。世界で唯一、一色のみでできた国旗です。緑色はイスラームの開祖ムハンマドのターバンの色とされ、イスラーム世界では最高の色とされており、イスラム社会主義と人民革命の決意を表します。またカダフィ大佐が1975年に出版した『緑の書』（人民主権・イスラム社会主義など自身の政治哲学を記した書）に基づく「緑色革命」も象徴します。1969年、カダフィ大佐がクーデターで王制を倒したときはエジプトと同じ国旗を採択しましたが、1977年、エジプトのサダト大統領が宿敵イスラエルを訪問したことに反発したカダフィ大佐が一夜にして国旗を現在のものに変えたのです。首都トリポリの町には緑色をした門構えの家や建物が多く、道路わきにも緑色の旗が掲げられています。
- 3 **ホント** 「ジャマーヒリーヤ」は「直接民主主義」を指します。つまり、選挙によって選ばれた国民の代表による政治ではなく、18歳以上の国民すべてが直接国政に関わるのです。カダフィ大佐は、その著書「緑の書」の中で、選挙によって選ばれた代表による政治は非民主的であり、人民が直接参加する「人民会議」こそが民主主義の原点であると言っています。政府も議会も否定し、西洋諸国にはない独自の民主主義を育てようとしているのです。
- 4 **ホント** リビアの通貨は、リビア・ディナール (LD) です。紙幣は、LD0.25、LD0.5、LD1、LD5、LD10、LD20の6種類あります。
- 5 **ホント** 国土の93%が砂漠です。一言で砂漠といっても、砂砂漠、岩石砂漠、高原、オアシス、湿地帯、湖など、さまざまな形状があります。国土に占める森林面積は0.2%で世界196カ国中193番目という狭さです。
- 6 **×ウソ** 総面積は177万平方kmで、日本の約4.7倍、アフリカでは4番目に広い面積を持つ国です。
- 7 **ホント** 2007年現在、リビアの一人あたりGDPは 11,484米ドルで、世界では50位、アフリカでは1位となっており、GDPの90%以上が石油関係で占めています。国内総生産でいうと、世界で62位、アフリカで6位となっており、一人あたりのGDPが高いのは、人口が少ないことも要因となっています。  
 Economic&Social Data Rankings ウェブサイト
- 8 **ホント** しょっぱいと言っても、日本でいう入浴剤のバスソルト程度なのですが、それでも日本茶や紅茶はおいしく入れられないので飲料用には適しません。リビアの水道水はほとんどが地下水を汲み上げて供給しているので最初から地下水に塩分が含まれているのかもしれませんが。
- 9 **×ウソ** リビアはイスラーム法の中でも啓典と伝統を重視するマーリキー派が90パーセントを占めています。そのためイスラーム法の遵守に非常に厳格で、特に、アルコール類と豚肉の持ち込みは厳しく禁止されています。トリポリの空港には瓶を感知するスキャナーがあり、それを通れなければ空港に居続けることとなります。ホテルやレストランではノンアルコールドリンクやソフトドリンクが出されます。トリポリ市内や砂漠地帯では違法にアルコール類を扱っている店もありますが、アルコールを飲んでいるところが見つかったら、非イスラム教徒であっても懲役刑、罰金刑に処せられる場合があります。

# リビア歴史と世界遺産...浪漫の旅

① 人類共通の財産を大切に残していこうというユネスコの世界遺産。  
2009年3月現在、リビアには5つの世界遺産があります。

① リビアの5つの世界遺産。P.10のカードはそれぞれの世界遺産について説明したのですが、A～Eのどのカードがどの世界遺産のものだと思いますか？



サブラータの古代遺跡 (1982年登録)



レプティス・マグナの古代遺跡 (1982年登録)



ガダーメスの旧市街 (1986年登録)



タドラット・アカクスのロック・アート遺跡群  
(1985年登録)



セイリーの古代遺跡 (1982年登録)

 政府観光局ウェブサイト

A

ギリシアの古い植民都市で紀元前7世紀末にドリス人が植民して建設しました。リビア人との通商で繁栄しましたが、さまざまな国に支配された後、千年もの間、砂の中に埋もれていました。この遺跡は、市街地の遺構、その500mほど下方のギリシアの神々を祀るアポロの聖域、ゼウス神殿の3つの区域に分かれており、ヘレニズム時代の彫刻が多く発掘されています。当時、この地域はギリシアに食物を供給する穀倉地帯でした。緑が多く、比較的、過ごしやすい高原地帯にあり、リビアのみならず北アフリカの中でも重要な土地でした。

B

アフリカ最大のローマ都市遺跡。建設年代ははっきりしませんが、紀元前7世紀ごろから、母国のティールから逃れたフェニキア人や西のカルタゴから移住したフェニキア人の植民都市として発達しました。後に港湾都市として栄えます。カルタゴの衛星都市として商業・交易の中心にもなりました。

C

最高地点1506mの岩の大地に涸(か)れ川(ワディ)が多く残る遺跡です。数多く残っている岩絵は、紀元前1万2000年ごろから紀元前100年ごろのもので、ゾウ、キリン、ダチョウ、トリ、カバ、ラクダなどの野生の動物や女性が髪を結う姿、結婚、戦争、家畜の飼育場面など人々の生活が描かれています。これらの絵はかつてこの地は湿潤気候で、草木が大地を覆い、絵に描かれているような数多くの野生動物が生息していたサバンナだったことを物語っています。

D

ベルベル語で「穀物市場」を意味し、フェニキア人によって築かれた交易都市です。紀元前517年からはカルタゴの衛星都市となり、スーダンからの宝石や金の中継拠点として栄えました。紀元前2世紀にはギリシア人によってギリシア彫刻、都市建築が持ち込まれました。カルタゴがローマに滅ぼされるとオリーブや小麦などを供給し、「ローマの穀倉」という異名がつけました。神殿、元老院、公会堂などのほか、北アフリカ最大の円形劇場があります。

E

「砂漠の真珠」として知られるオアシス都市です。地中海からアフリカ奥地につながる隊商交易路の合流点の交易都市として栄えました。先史時代から古代ローマを経てオスマン帝国に至る歴史を物語る遺物があちこちに何気なく用いられており、ベルベル、トアレグ、アラブの民族伝統とイスラームの文化が融合して一体化した、不思議な中世都市の雰囲気漂っています。広場の柱や、装飾のプレートなどにもローマの柱が用いられていたり、砂漠の部族の護符が描かれていたりします。



P.9～10のこたえと解説です。



世界遺産を通して、リビアの歴史の長さ  
と雄大さを体感する。

**A** セイリーの古代遺跡      **B** レプティス・マグナの古代遺跡

**C** タドラット・アカクスのロック・アート遺跡群

**D** サブラータの古代遺跡      **E** ガダーメスの旧市街



**A** セイリーの古代遺跡

別名キレーネまたはクーリナ、地元ではシャハットと言われる。地中海をはるかに望む丘の上にあります。

リビア政府観光局ウェブサイト

**B** レプティス・マグナの古代遺跡



円形劇場

野口昌徳



市場跡

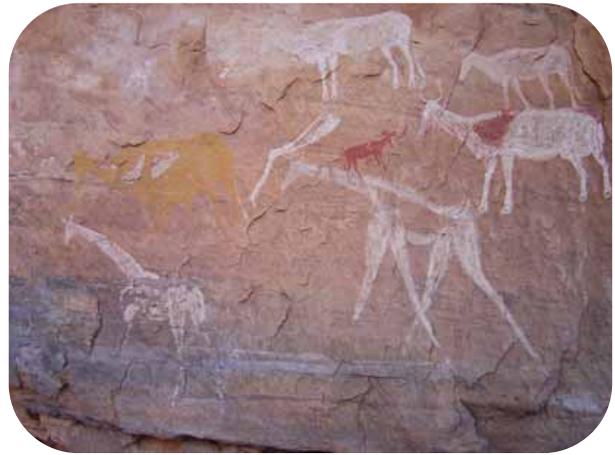
野口昌徳

## C タドラット・アカクスのロック・アート遺跡群



 リビア政府観光局ウェブサイト

## 岩絵



 リビア政府観光局ウェブサイト

## D サブラータの古代遺跡



 リビア政府観光局ウェブサイト



 野口昌徳



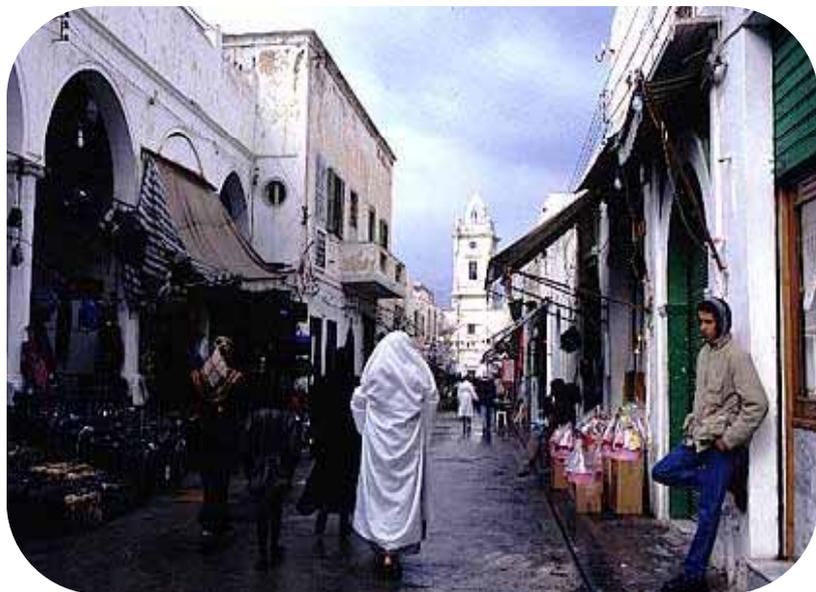
 野口昌徳

## E ガダーメスの旧市街

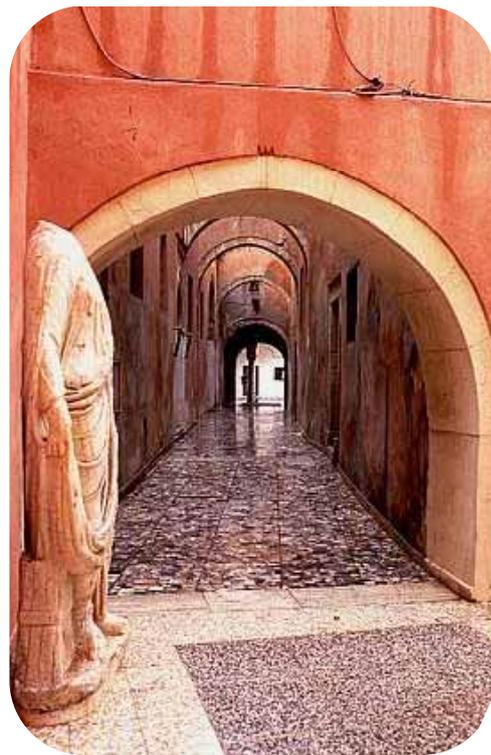
地元の人はガダーマスと呼びます。  
チュニジア、アルジェリア国境も近いサハラの  
オアシスです。水がかれて人々は新市街に移り、  
今は無人の街になっています。



旧市街



青柳直子



旧市街にあるトリポリ城の庭園



青柳直子

新市街

青柳直子



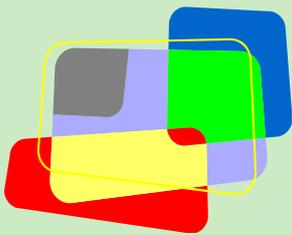
野口昌徳



野口昌徳

## ■ 第2章

# へえ～！リビアと日本



# リビアと日本を比べてみたら...これってウソ？ホント？

① リビアと日本、比べてみると意外と似ている??

① リビアで走っているのはほとんどがヨーロッパの車。日本の車はほとんど走っていません。



② リビアの学校制度は日本と同じ6・3・3制です。



③ クスクスは北アフリカの代表的な料理で世界最小の pasta。リビアでは、お祝い事の時に食べられ、日本のちらし寿司と感覚が似ています。



④ 日本と違って、リビアの食料自給率はとても高いです。



⑤ 突然ですが、リビアの人たちは大のトマト好き。日本の約10倍ものトマトを食べます。



⑥ リビアで結婚できる年齢は日本と同じです。



⑦ 残念ですが、日本と比べると、リビアの治安は断然悪いです。



⑧ リビアはイスラム教の国なので、男性の社会的地位が高い。離婚のときの条件も女性にとっては日本の方が好条件です。



⑨ 日本の家猫(飼い猫)は、実はリビアヤマ猫が祖先なんです。



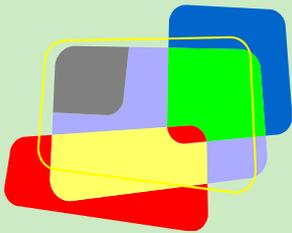


- 1 **×ウツ** リビアではトヨタやニッサン、スズキなどの日本車や韓国のテウという自動車が走っています。最近ではBMWやベンツも街で見かけるようになりました。しかし、実は違法なコピー車もたくさん走っていて、例えば、TAYOTA、TAYO AUTO、SUZOKIなどちょっと笑えてしまうような日本車も走っています。ちなみに、リビアはジュネーブ条約に加盟していないので、日本で発給された国際運転免許証での運転はできません。また、交通事故率は日本の数倍。ご注意ください。
- 2 **ホント** リビアの教育制度は、日本と同じように6・3・3制で6歳から15歳が義務教育で、公立学校は男女共学、女性の教育も重要視されています。保育園、幼稚園は義務教育ではありませんが、近年では幼児教育が重視されています。リビアの教育の特徴としては、イスラム教教育が重要視されていること、授業として軍事訓練も行われること、そのため冬季の制服は迷彩服です。なお、学費は無料です。
- 3 **ホント** クスクスとは細かい粒状の世界最小のパスタ。北アフリカの代表的な主食です。同量の熱湯を加えるだけで簡単に元に戻ります。羊肉や鶏肉、野菜などを煮込んで香辛料を効かせた辛い煮汁をかけると、北アフリカの伝統的なクスクス料理になります。リビアでは、クスクスはお祝い料理で、お客を迎えるとき、婚約や結婚披露のとき、誕生日や卒業のお祝いなど、誰もが好きなちょっと改まった家庭料理なのです。
- 4 **×ウツ** リビアでは、農産物の供給が、急激な人口増加に追いつかず、食料の大部分を外国からの輸入に頼っています。推定ですが、食料の輸入率は70%です。特に、野菜や乳製品などの生鮮食品は、隣のエジプトから多く輸入しています。
- 5 **ホント** FAO(国際連合食糧農業機関)の公表資料によると、2003年のデータにおいて、一人当たりのトマトの消費量は多い方からリビア、ギリシャ、チュニジア、トルコ、エジプトの順になっています。2001年時点では日本の一人当たり8.9kgに対してリビア 80.3kgと約10倍にもなるのです。確かに、リビア料理はトマトベースが多いようです。旧宗主国だったイタリアの影響を強く受けているからでしょう。
- 6 **ホント** 1969年に革命があり、その3ヶ月後に男女同権が決定しました。その際、男子の結婚年齢は18歳、女子は16歳と規定されました。イスラム法で4人まで許可されている多妻婚はそのまま残されていますが、2人目をめとる場合、最初の妻の同意を得ることを義務付けています。ちなみに、リビアでは、男性より女性の数が多く、男性1人に対し女性4人という人口比と言われています。一夫多妻制は、そうした状況を反映しているのです。
- 7 **×ウツ** 治安のよい、悪いを比べることは難しいのですが、リビアが日本より断然治安が悪いということはありません。むしろ、今の日本より治安がいいかもしれません。リビアでは、基本的な光熱費や水道代は無料。医療、教育費も無料、税金は無し。給料は欧米と比べ様も無いほど低いのですが、あらゆる商品に対して国が補助金を出しているのです。野菜、TV、クルマなどがとても安く手に入ります。また、大学である程度の成績を修めると、海外留学も国費で可能。25年間働くと、その後は、それまでの給料の3倍のレベルの年金が死ぬまで支払われる、という夢のような老後が待っているのです。だから生活に困っている人はほとんどいないため、犯罪も少ないのです。
- 8 **×ウツ** いえいえ、リビアで離婚をすると、男性は大変です。結婚したら、いかなる理由があれども離婚の際は男性がトランクひとつで家を出なければなりません。もちろん養育費は払い続ける上に、妻は国から多大なる援助を受けられるのです。日本では、イスラム教というと男尊女卑のイメージがありますが、実は女性がとても守られていることも多いのです。
- 9 **ホント** リビアヤマ猫は来たアフリカからアジア南西部に生息しており、体長50～60センチ。毛の色は灰色や淡黄色です。2007年に、アメリカ、イギリス、ドイツの国際調査チームがDNA解析をしてリビアヤマ猫が家猫の祖先であることを発表しました。



## ■ 第3章

一緒に考えよう！こんな課題



# 生まれ変わったリビア...そして新たな課題

① リビアは今、国際社会の一員として生まれ変わろうとしています。



- ① リビアは少し前まで、「アラブの狂犬」などと言われ、国際社会の中で孤立していました。しかし、今、リビアは生まれ変わろうとしています。2003年、大量破壊兵器 (WMD)の廃棄を世界に向かって宣言し、国際社会への道を歩み始めたのです。それは、他の国にとっても大歓迎なのですが、そうした動きに伴って、リビア国内でも様々な変化が起こってきています。P.20の資料を読んでみましょう。

- ② 1つの国が国際社会の一員として、他の国とつながりを築いていくことはとてもいいことですが、価値観も文化も異なる外国と関係を持つことによって、国内ではメリットもデメリットも生じてきます。今読んだ資料を参考に、どんなメリット、デメリットがあるか考えてみましょう。

メリット	デメリット

- ③ 日本の場合はどうでしょう? リビアと同じような課題が出てきているのでしょうか? もし、リビアになくて日本にはあるメリット、デメリットがあれば、違う色のペンでつけ加えましょう。
- ④ では、メリットを活かし、デメリットを少しでも小さくして、外国とよい関係を築いていくためにはどうすればいいでしょう?みんなで考えてみましょう。



## 素顔のリビアを探して

※ 長文なので、参加者に合わせて  
アレンジしてください。→P.23

ル・モンド・ディプロマティーク 訳・近藤功一 2006年7月30日

2006年5月15日、ベネズエラに対する制裁措置を発動した同日に、アメリカはリビアとの関係正常化を発表した。大量破壊兵器を放棄して以後、かつて人権侵害を非難された「ならず者国家」は、ワシントンに国際社会の一員と認定されるようになった。カダフィ大佐が舵を切った「新たな流れ」は、証券市場を開設するというリビアの決定にも表れている。[フランス語版編集部]

古代遺跡や洞窟壁画を楽しもうと地中海を渡ってリビアに入国すれば、思わぬ場所で土地の少女がこんなふうにはしゃいでくるのに驚くことだろう。「ジュ・スイ・マラドって曲知ってるかしら」。南西の端にある小さな町、作家イブラヒム・アル・コーニー(1)の出身地のガートでも、町の人がこのセルジュ・ラマの曲を口ずさんでいるのに気づく。こんな体験を繰り返すうちに、都市部に砂埃が舞い、歩道はでこぼこで、パリ郊外のようなオンボロの団地が立ち並んでいても、「大リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリヤ国」で何かが変化したことがわかるだろう。

10年間に及んだ国際的な孤立状態の後、リビアは世界とのコンタクトを取り戻した。それは外交関係の回復といったレベルにとどまるものではない。すでに3年前からティーンエイジャーは、堅苦しいリビア国営テレビを見限って、オーディション番組「スター・アカデミー」などに夢になっている。もちろんこれはフランスの番組ではなく、レバノンの衛星チャンネルLBCが放送しているアラブ版だ。シャンソンの古典「ジュ・スイ・マラド」がリビアの砂漠地方まで浸透したのが2004年。今ではリビアでもテレビ番組をザッピングするのが当たり前になった。

厳しい体制の下でも、パラボラアンテナの普及に伴って、新しい風が吹き込んでいる。以前は5000ディナール(約45万円)だったパラボラアンテナは、200ディナール(2万円弱)にまで値下がりし、大衆に手の届くものとなった。住宅の屋根に偽の貯水槽を作りつけ、そこにアンテナを隠した時代は今昔だ。いたるところに安いネットカフェがある。砂塵が舞い上がり、電子機器には不都合な環境ながら、コンピューターがある家は珍しくない。数カ月前からは、大容量回線も使えるようになった。

国民の学歴も高く、多くの大学があり卒業生も数多い。非識字率は14%以下で、若い世代はほとんど読み書きができる。ただ、外国語教育は1984年に政治的な理由で中止され、最近になってようやく再開されたが、レベルは悪化している。

もうひとつ、新たに見られるようになったものは旅行である(その持ち合わせのある人にとってではあるが)。多くの航空会社がリビアに乗り入れており、出国ビザを取得する必要もなくなった。うまく多額の政府奨学金を得て海外に留学したり(セブハに住むフランス語教師によれば月額1600ユーロ)、大きな国営企業の職員なら研修や駐在に出るチャンスを狙う。「これほど多くの人が旅行する国を見たことがない」とマグレブ諸国に拠点を置くフランス人企業家は断言する。移民輩出国ではないことから、リビア人にとってヨーロッパ諸国のビザ取得はアルジェリア人ほど面倒ではない。長いこと世界から孤立していた国に欧米の観光客が訪れるようになったことも、とくに海外に出ることのできない人々にとって、世界との接点を取り戻す機会になっている。(中略)

輸入の自由化に伴い、誰でも海外製品を購入するために融資口座を開くことが可能になった。ガルガレッシュ通りやベン・アシュール通り、トリポリ中心街のショーウィンドーには、最新の電子機器や家電製品、高級インテリア、ブランドの服や中国製の服、何でも揃っている。国の補助金を受けた地元産品を不正に輸出する者はいても、空っぽのかばんを持ってマルタやチュニジアに行き、商品を詰め込んでこっそり戻ってくるような者はもういない。

ここ数年の民営化により、消費意欲は旺盛だ。37歳のオマルは、アラブ首長国連邦のドバイで衛星放送受信機を買いつけ、リビア南部の町で売りさばいた(飛ぶように売れた)。その収入で、セブハでネットカフェを開業し、両親の家の上に部屋を建て増し、そしてもちろん結婚もした。公務員の月給が200ディナール(2万円弱)という御時世で、結婚には少なくとも8000ディナール(約70万円)の大金をはたかなければならない。

### お洒落なカフェに携帯電話

銀行は1年以上前から、有利な住宅ローンを始めている。貸付額は平均4万ディナール(約360万円)、金利はこれ以上ないほど低く抑えられ、しかも返済期間は20年や40年でよいなど、夢のような好条件だ。今後数年間で住宅35万棟を建設する計画もあり、土木建設業界はセメント不足に陥るほどのブームに沸いている。

それに賃貸は外国人向けなので、住宅は建設するほうが手っとり早い。リビアの住宅事情がどうなっているかという、1970年代後半に「家はそこに住む者のもの」とする原則が打ち出された結果、数千人のセカンドハウスが没収され、ホームレスのリビア人による占有が全面的に認められた。時代は変わり、政府は没収した財産の返還や、不法とされるようになった占有者への立ち退き補償金を口にするようになった。しかし、この決定は政府の姿勢をアピールするという意味が強く、実施はまだ具体化していない。

この1年半で首都にできた3つのスーパーマーケットのひとつメハリで、リビア人もカートを押しながら買い物するようになった。このスーパーは、400平方メートル足らずとはいえ、国内では最大で、唯一きちんとした駐車場を完備している。これはポイントが高い。韓国車を中心とした自動車の保有台数は年々増大し、最近も大きな買い換えラッシュがあった。自家用車の所有は、体制の思想的支柱となっている1973年のカダフィ大佐の著作『緑の書』の中で基本的権利のひとつとされており、補助金によって大々的に支援されている。とくに医者、軍人、治安局員などの公務員は優遇されている。所有者は非常に有利な条件で

ローンを受けられる。石油会社のホワイトカラーである33歳のナジュマは、「おかげで2、3年前から街中をスムーズに走ることができなくなった」と、毎日の渋滞に苛立つ。

買い物をしたり、夕暮れ時に大通り沿いでぴかぴかの車を運転することは、若者たちの時間つぶしでもある。友人の訪問や家族の祝い事、宗教的な祭礼以外にこれといった娯楽がなく、彼らは退屈しきっている。サッカー以外に（しかも国内チームのうち2つはカダフィの息子が経営している）、文化活動やスポーツイベントはほとんどない。しかも、リビアの革命原則に反するような団体の設立は、刑法207条によって極刑と定められている。

とはいえ、トリポリの高級住宅地や、旧市街、「緑の広場」などには、シックなカフェやレストランのテラスといった新しい社交場も見られるようになった。最近では3カ月前に、高級住宅地ベン・アシュールに小奇麗なカフェテリア、イワンがオープンした。お洒落な内装に赤い革張りの肘掛け椅子、飲み物のメニューも豊富である（当然アルコール類はない）。ジェルで整髪し、携帯電話を手にし、流行のファッションをまとった若者がたくさんいる。人口が560万人のこの国で、300万人が携帯電話を持っている。そして携帯の電話網は広がり続けている。

「この3年で最も変わったことと言えば、日が落ちてからでも通りで女性を見かけるようになったことだ。女性たちは、夜中までやっている新しい店に買い物に行き、カフェでお茶をしている」と、アルジェリア人の駐在員は嬉しそうに語った。

しかし、社会には伝統や社会規範が色濃く残っている。顔を覆うスカーフは「悪魔の創造物」と発言するなど、時に欧米のフェミニストたちが賞賛さえるカダフィの発言とは大きな隔たりがある。イスラムは部族内の強固な連帯とともに、人々の日々の生活の中で大きな地位を占めている。

35歳のラティファは航空会社に勤務しているが、自分で事業を起こしたいと考えている。やりたいことはカーテン作りや部屋のインテリア、心配の種は資金をどうするかだ。「イスラムは融資に対する利子を禁止している」から、銀行で融資を受けるつもりはない。いざ事業が始まれば、他人の家に一人で入らなければならないが、そうした行為は良い目で見られない。「でも、家にいるのも、こうしたことを決めるのも、たいしては女性だから、快くドアを開けてくれるはず」と彼女は言う。

男女別の生活スタイルは、中規模都市などにまだ残っている。学校は必ずしも共学制ではなく、結婚式のお祝いは別々のテントで執り行われる。多くの家庭には2つの居間があり、男性、女性がそれぞれ分かれて昼寝や食事、応接に使っている。

## 女性たちの立場

外資系企業で経理をしているファリダは、リビアでは珍しくスカーフをしていないが、「良いことではないけど」と語っている。いつかは腹を括る日が来るだろう。結婚がそのきっかけになる可能性は高い。しかし、2人の姉妹同様、30歳を過ぎた彼女は、独立した生活に慣れきっており、焦って相手を見つけようとはしていない。何人かの友人はすでに離婚し、仕事を続けている。「離婚した後の問題は、その後どこに住むかということ。一人で住むのは悪い目で見られるし、そうなると両親の家に戻ることになる。でも、普通は新しく結婚した弟に場所を取られているし、出戻りはあまり歓迎されない」リビア女性は近隣諸国と比べて、大きな権利を享受している。とはいえ、道徳的なタブーは根強く残っている。悪い評判を立てられないよう、一人旅や遠距離通学を禁止されている女性もいるし、夫以外と性的関係を持った女性には暴力が振るわれ、世間体を傷つければ村八分にされる。しかしながら、リビア女性は、自由に夫を選ぶことができ、離婚手続き上も不利ではない（双方それぞれ離婚を申請でき、相当額の扶養料を得られ、一方的な離縁は廃止された）。

政府指導者は、女性が働くことを強く後押ししており、「この10年間で幼稚園や託児所は大幅に増加した」と、中学校で生物教師をしているラビアは説明する。大学では男子よりも人数が多い女子学生は、教師、公務員、外資系企業の秘書、歯医者、医者、エンジニア、建築士などになっている。しかしながら、女性の仕事が素晴らしいことだと持ち上げられ、高い教育を受けていても、女性の正規就業率は国連開発計画（UNDP）によれば26%でしかない。ちなみにサウジアラビアは22.4%、レバノンでは30.7%、チュニジアは37.7%である。

男性はおおむね、社会の変化を冷静に受け止めている。「家にお金があればあるだけ、家を建てるために大きな借金をすることができる。そして離婚費用も安くすむ」と、セブハ地方に住むトゥアレグ族のアブダッラーは断言した。46歳の彼には、同じ家の違う階に住む2人の妻と18人の子供がいる。望んで結婚した最初の相手となった第二夫人は、情報処理の技術者である。生業である家禽の飼育が繁盛しているので、第三夫人を探そうと思っている。

一夫多妻制は、法律で禁止されているが、南部の町では容認されているようだ。そこでよく引き合いに出されるのは人口比である。1人の男性に4人の女性という割合だという。若い男性の行動を見れば、死亡率がとんでもなく高いのかと思いたくもなるが、ごく最近の人口調査の結果は明白である。リビアは、男性より女性が少ない珍しい国のひとつなのだ。アルコールの消費は厳禁で、観光客は滞在期間中ずっと禁酒を覚悟しなければならない。自家製のナツメヤシの地酒に挑戦するか、外交官の家に招いてもらうという手もある。一定量のストックが許されているのは外交官だけで、これに多国籍企業の幹部は大いに不満を持っている。南部では、炎天下の14時から17時までに加え、祈りの時間も店が閉まってしまう。

伝統の力が強かろうと弱かろうと、ほとんど製造業のないこの国に新しい製品が流れ込むにつれ、購買力の大小が強烈な問題になりつつある。関税率の引き下げによって輸入業者の利益は増えたが、輸入品の価格は下がっていない。市場に安い中国製品があふれるようになったにしても、20年以上も据え置き公務員の給料が不十分なことに変わりはない。民間と公共部門の所得格差は、開く一方である。窓やドアの製造会社を営む29歳のアブデルカデルは、「仕事が立て続けにあるときは、2週間で1000ディナール（約9万円）稼ぐこともできる」

公共部門の職員（最新の調査によると、170万人の労働人口のうち教師、公務員、医療従事者などを含む90万人が公共部門で働く）は、やりくりのために副業を増やしている。タクシーの運転手をやる者もいる。「病院の局長はみんな、午後になると私設のクリニックに行く」と情報通は教えてくれた。「大学で教鞭もとり、薬の輸入もする」。店を開く者もあり、午前中は家族が

店を開く者もあり、午前中は家族が切り盛りするかアフリカからの移民を雇う。南部の国境地帯で、ニジェール人やモーリタニア人からフランス語で声をかけられるのはよくあることだ。

しかし、かつては街道沿いに鈴なりになって仕事口を探していたアフリカ人たちの姿は、2000年に人種差別に端を発した暴動事件(2)が起き、国外追放が行われてから見かけなくなった。欧州連合(EU)との協力政策のもと、正規の身分証の携帯は必須である。「ソマリア人の家政婦が3カ月の間いなくなった」と、家族がトリポリに住んでいる在英の情報処理技術者ムハンマドは語った。「バスを降りるところを警察に呼び止められ、身分証を提示することができなかった彼女は、すぐさま収容センターに送り込まれてしまった」

### リビア人の新たな口癖

薄給を補うような再分配システムは健在だ。リベラル派のガネム前首相は、トマトペーストといった一部の製品の補助金をカットしようとして支持率が急落し、撤回を余儀なくされた。パン、砂糖、油といった基本的な食料品には現在も補助金が出ており、水道は南部も含めて全国に引かれており、ただ同然である。電気もほぼ100%近く行きわたり、料金も安い。メーターはほとんどなく、ある場合も訴えられるおそれは低いから、電気公社に料金を支払わないこともよくある。

ガソリンだけは30%値上がりしたが、満タンにしても7ディナール(約600円)もかからない。質のよいサービスを求めて新設の私立に流れる者も多いが、公立の病院や学校は無料である。そして、失業保険も整備されつつある。

結果として、UNDPIによる人間開発指数のリビアの順位は、世界で58番目、アフリカでは1位となっている。就学率はほぼ100%で、平均寿命は73.6歳である。

僅か560万人の人口ながらアフリカでも広大な国のインフラは、老朽化し、沿海部に集中している。道路網は国土を広くカバーしているが、路面の状態は悪化している。ひとつには気候のせい、また南部からの貨物トラックが増えているせいだ。運転手は同じ車線を走ることが多く、対向車が来るぎりぎりまで車線を変更する。セブハやガートのような南部の町には、公共の交通手段やタクシーもない。都市部では、でこぼこでゴミだらけの道路を歩くのに、しっかりと靴を履いたほうがよい。町の清掃状態はかなりひどい。

不満の広がりを感じられるが、それを口にするときには目の前の舗道に目を走らせる。「緑の書に書かれているように、民主主義とは人民による人民の支配のことだ」と、観光ガイドでアラビア語の教師でもあるイブラヒームは力説する。彼がリビアのジャマヒリヤ体制を熱心に擁護するのにはわけがある。教師としての給料はもらっているが仕事はせずに、彼は3年前から南部の治安局の5人いる副責任者の1人を務めている。「みんな私を知っている。私は国と人民の橋渡し役だ。私たちの国は、人間の体に似ている。すべての器官は運動しなければならず、そうでなければ大混乱になってしまう。手と足は警察だ。脳が私たちで、目が市民全体だ。もし隣人と問題が起きたり、妻を殴る夫がいれば、私に電話が入り、当局にそれを報告し、問題を起こした者を呼び出す。みんなが運動している。これこそが民主主義だ」

すれ違った警官たちは彼に元気よく挨拶してきた。「みんな私の配下にあることを分かっている」と自慢げにイブラヒームは言った。治安局員証の効力は絶大で、さらに有意義な情報を提供すれば(実際には密告)、乗用車を買うための補助金、住宅ローン、様々な許可証など、大きな報賞が与えられる。「でも、もし学校で私が必要とされるときは、いつでも準備ができていなければならない」。まさに聖職だと言うべきか。「そして私は、イブラヒームの友達なのさ」と彼のアシスタントはおどけてみせた。

往時は首都であった東部の都市ベンガジの雰囲気は、また異なったものだ。2006年2月に起こったムハンマドの風刺画に対する抗議デモが、最終的には体制批判に転じたように、大胆な批判が口にされている。トリポリの発展を前にして、ここには不満がたまっている。かつて王制を支持したサヌシー教団の牙城であるベンガジは、激しい弾圧を受けている反政府イスラム主義勢力の拠点でもある。部族の連帯がいたるところに及んでいて、「影響力のある部族に逆らって、復讐や名誉の殺人を事件として取り上げようとする判事はほとんどいない」とベンガジに住む20歳のハサンは説明する。

しかし国民の異議申立は、うんざりムードといった形でしか表れていない。リビアのジャマヒリヤ体制の根幹をなす地方人民委員会(3)の出席率は落ちている。2005年度は300億ドルという記録的な石油収入によって国庫が潤っている中、体制には当面のところ、再分配システムや大規模なインフラ整備プロジェクトを通して、社会の合意を取り付けるだけの資金がある。しかしながら、100以上の衛星放送チャンネルを視聴できるリビア人は、中東地域の中で自分たちがどう位置付けられているかを知り、不満を隠さない。「なぜリビアはアラブ首長国連邦のように発展していないのか。この産油国は1970年代には我が国と同様、ただの砂漠地帯の小さな国でしかなかったのに」。これがリビア人の新たな口癖になっている。(1) 現代の偉大なアラビア語作家の一人であるイブラヒーム・アル・コーニーは、欧米ではまだほとんど知られていない(訳註:日本語では次の紹介書がある。奴田原睦明『遊牧の文学:イブラヒーム・アル・コーニーの世界』、岩波書店、1999年)。

(2) 2000年9月、アフリカ系移民を標的とした暴動は、100人以上の犠牲者を出した(公式には死者6人)。当時250万人いたアフリカ系移民は、現在は60万人に減っている。

(3) 地方人民委員会の数は400以上ある。直接民主主義を実現するためにカダフィが考案した体制の下部機関。18歳以上の市民は出席して改善すべき点を論じなければならない。人民の「決定事項」は委員会から上級機関に伝達される。3日間の会期中、すべての店はシャッターを下ろさなければならない。この地方人民委員会には、革命委員会のメンバーが入り込み、目を光らせている。決定事項が実際には逆の方向、つまり上から下へ流れるようになっていることを知らない者はない。そのため、何か実利にあずかれそうだとした場合を除いて多くの人が出席しなくなり、最近カダフィはそのことに不満を漏らしている。

(ル・モンド・ディプロマティーク日本語・電子版2006年7月号)

## 参考資料(簡易版)

2006年5月15日、ベネズエラに対する制裁措置を発動した同日に、アメリカはリビアとの関係正常化を発表した。大量破壊兵器を放棄して以後、かつて人権侵害を非難された「ならず者国家」は、ワシントンに国際社会の一員と認定されるようになった。カダフィ大佐が舵を切った「新たな流れ」は、証券市場を開設するというリビアの決定にも表れている。[フランス語版編集部]

10年間に及んだ国際的な孤立状態の後、リビアは世界とのコンタクトを取り戻した。今ではリビアでもテレビ番組をザッピングするのが当たり前になった。(ザッピングとは、CMや番組の途中でチャンネルを変えること。)

厳しい体制の下でも、パラボラアンテナの普及に伴って、新しい風が吹き込んでいる。以前は5000ディナール(約45万円)だったパラボラアンテナは、200ディナール(2万円弱)にまで値下がりし、大衆に手の届くものとなった。いたるところに安いネットカフェがある。砂塵が舞い上がり、電子機器には不都合な環境ながら、コンピューターがある家は珍しくない。数カ月前からは、大容量回線も使えるようになった。

国民の学歴も高く、多くの大学があり卒業生も数多い。非識字率は14%以下で、若い世代はほとんど読み書きができる。ただ、外国語教育は1984年に政治的な理由で中止され、最近になってようやく再開されたが、レベルは悪化している。

もうひとつ、新たに見られるようになったものは旅行である(その持ち合わせのある人にとってではあるが)。長いこと世界から孤立していた国に欧米の観光客が訪れるようになったことも、とくに海外に出ることのできない人々にとって、世界との接点を取り戻す機会になっている。

この1年半で首都にできた3つのスーパーマーケットのひとつメハリで、リビア人もカートを押しながら買い物するようになった。このスーパーは、国内では最大で、唯一きちんとした駐車場を完備している。自家用車の所有は、補助金によって大々的に支援されている。石油会社のホワイトカラーであるナジュマは、「おかげで2、3年前から街中をスムーズに走ることができなくなった」と、毎日の渋滞に苛立つ。

買い物をしたり、夕暮れ時に大通り沿いでぴかぴかの車を運転することは、若者たちの時間つぶしでもある。友人の訪問や家族の祝い事、宗教的な祭礼以外にこれといった娯楽がなく、彼らは退屈しきっている。サッカー以外に(しかも国内チームのうち2つはカダフィの息子が経営している)、文化活動やスポーツイベントはほとんどない。しかも、リビアの革命原則に反するような団体の設立は、刑法207条によって極刑と定められている。

ジェルで整髪し、携帯電話を手にし、流行のファッションをまとった若者がたくさんいる。人口が560万人のこの国で、300万人が携帯電話を持っている。そして携帯の電話網は広がり続けている。

「この3年で最も変わったことと言えば、日が落ちてからでも通りで女性を見かけるようになったことだ。女性たちは、夜中までやっている新しい店に買い物に行き、カフェでお茶をしている」と、アルジェリア人の駐在員は嬉しそうに語った。

しかし、社会には伝統や社会規範が色濃く残っている。顔を覆うスカーフは「悪魔の創造物」と発言するなど、時に欧米のフェミニストたちが賞賛さえするカダフィの発言とは大きな隔たりがある。イスラムは部族内の強固な連帯とともに、人々の日々の生活の中で大きな地位を占めている。

男女別の生活スタイルは、中規模都市などにまだ残っている。学校は必ずしも共学制ではなく、結婚式のお祝いは別々のテントで執り行われる。多くの家庭には2つの居間があり、男性、女性がそれぞれ分かれて昼寝や食事、応接に使っている。

リビア女性は近隣諸国と比べて、大きな権利を享受している。とはいえ、道徳的なタブーは根強く残っている。悪い評判を立てられないよう、一人旅や遠距離通学を禁止されている女性もいるし、夫以外と性的関係を持った女性には暴力が振るわれ、世間体を傷つけば村八分にされる。しかしながら、リビア女性は、自由に夫を選ぶことができ、離婚手続き上も不利ではない。

政府指導者は、女性が働くことを強く後押ししている。しかしながら、女性の仕事が素晴らしいことだと持ち上げられ、高い教育を受けていても、女性の正規就業率は国連開発計画(UNDP)によれば26%でしかない。ちなみにサウジアラビアは22.4%、レバノンでは30.7%、チュニジアは37.7%である。

一夫多妻制は、法律で禁止されているが、南部の町では容認されているようだ。伝統の力が強かろうと弱かろうと、ほとんど製造業のないこの国に新しい製品が流れ込むにつれ、購買力の大小が強烈な問題になりつつある。20年以上も据え置ききの公務員の給料が不十分なことに変わりはない。民間と公共部門の所得格差は、開く一方である。

公共部門の職員(は、やりくりのために副業を増やしている。タクシーの運転手をやる者もいる。店を開く者もあり、午前中は家族が切り盛りするかアフリカからの移民を雇う。しかし、かつては街道沿いに鈴なりになって仕事口を探していたアフリカ人たちの姿は、2000年に人種差別に端を発した暴動事件が起き、国外追放が行われてから見かけなくなった。

薄給を補うような再分配システムは健在だ。水道は南部も含めて全国に引かれており、ただ同然である。電気もほぼ100%近く行きわたり、料金も安い。ガソリンだけは30%値上がりしたが、満タンにしても7ディナール(約600円)もかからない。質のよいサービスを求めて新設の私立に流れる者も多いが、公立の病院や学校は無料である。そして、失業保険も整備されつつある。

結果として、UNDPによる人間開発指数のリビアの順位は、世界で58番目、アフリカでは1位となっている。就学率はほぼ100%で、平均寿命は73.6歳である。

僅か560万人の人口ながらアフリカでも広大な国のインフラは、老朽化し、沿海部に集中している。道路網は国土を広くカバーしているが、路面の状態は悪化している。ひとつには気候のせい、また南部からの貨物トラックが増えているせいだ。運転手は同じ車線を走ることが多く、対向車が来るぎりぎりまで車線を変更する。セブハヤガートのような南部の町には、公共の交通手段やタクシーもない。都市部では、でこぼこでゴミだらけの道路を歩くのに、しっかりと靴を履いたほうがよい。町の清掃状態はかなりひどい。

リビア人は、中東地域の中で自分たちがどう位置付けられているかを知り、不満を隠さない。「なぜリビアはアラブ首長国連邦のように発展していないのか。この産油国は1970年代には我が国と同様、ただの砂漠地帯の小さな国でしかなかったのに」。これがリビア人の新たな口癖になっている。



～リビアの人々 その1～

西欧諸国から見た  
カダフィ大佐の評価によって、  
リビアと言うと何となく  
怖いイメージを  
持ってしまいがちですが、  
リビアの人たちは  
とってもシャイではにかみやさん。  
自分からはなかなか  
話しかけてきませんが、  
こちらから話をする  
とにっこり笑って相手をしてくれます。



ウキバフェスティバルでリビアの女性  松本和人



 野口昌徳



 野口昌徳



トリポリの路上で遊ぶ仲良し2人組  野口昌徳



遺跡を見に来た家族  野口昌徳



# フォトギャラリー

## ~リビアの人々 その2~



トリポリ旧市街夜のスーク(市場)

📷 青柳直子



トリポリのくだもの屋さん

📷 青柳直子



砂丘のお土産屋さんものんびり、ゆったり...

📷 野口昌徳



旧市街バザールにて  
のんびり商売しているのがこの国らしい

📷 野口昌徳

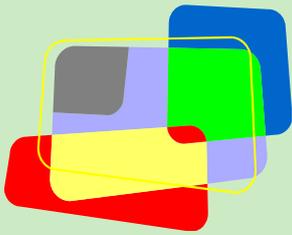
ベンガジの海で釣りを楽しむ地元の人々

📷 野口昌徳



■ 第4章

そして未来へ



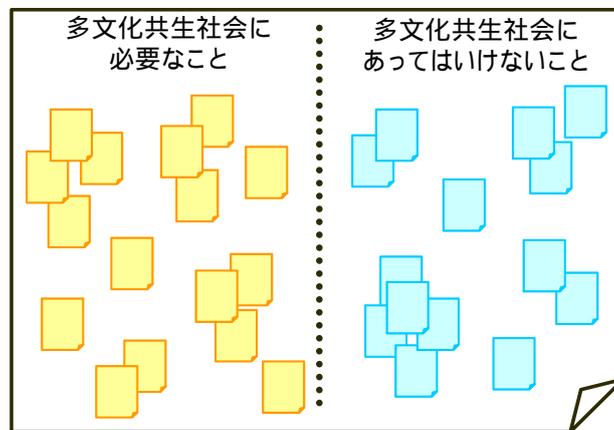
# 『多文化共生社会』ってどんな社会？

① 地球のみんなが一緒に生きていくということは  
どうのことなのでしょう？



- ① みなさんは、『多文化共生社会』ということばを聞いたことがありますか？  
「多くの文化が共に生きる社会」というのは、いったいどんな社会でしょう？  
「多文化共生社会に必要なこと」を黄色い付箋紙に、「多文化共生社会にあってはいけないこと」を青い付箋紙に書き出してみましょう。付箋1枚に1項目ずつ、できるだけたくさん書いてみてください。

- ② 4～6人のグループに分かれましょう。  
各グループで模造紙を用意し、半分に区切ります。左側には「必要なこと」、右側には「あってはいけないこと」を貼っていきます。みんなの意見を共有するために、1人ずつ読み上げながら貼ってください。また、他のメンバーが似たようなものを貼った時はその近くに貼ってください。



- ③ 模造紙にまとめたことをもとにグループで「多文化共生社会とは……な社会」という文章をつくってみましょう。

- ④ では、そんな社会を実現するために、私たちにできることは何でしょう？  
一人ひとり、A4の紙に「私たちにできること7か条」を書いてみましょう。

- ⑤ 一人ひとりがつくった7か条をもとに、グループで「多文化共生社会を実現するための7か条」にまとめ、右のように模造紙に書いてみましょう。

- ⑥ 全員で発表し、感想を話し合しましょう。

多文化共生社会とは

な社会

そんな社会を実現する  
ための7か条

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7

# 号外！号外！20年後の新聞です



20年後の地域と地球はどうなっているでしょう？  
どうなっているといいでしょう？

みなさんは新聞記者です。20年後の明日発行する新聞記事を書いているところです。  
20年後はどんなニュースが新聞に載っているでしょうか？だれにでもわかりやすいことばでまとめてみましょう。

- 1 まずは、グループで新聞名を決めましょう。  
模造紙を横にして半分に区切り、  
新聞名と日付を書き込みましょう。

20xx年 月 日	20xx年 月 日

新聞

- 2 20年後地域と地球がこんな風になっている  
といいなと思うことを想像し、ニュース記事に  
まとめてみましょう。模造紙の右半分に地域のニュースを、左半分に地球のニュース(あるいは、リビアのニュース)を書きます。

- 3 全員で発表し、感想を話し合ってみましょう。

- 4 さて、今の生活を続けていったとき、ニュースにまとめたような地域や地球が実現できると思いますか？  
実現するために、自分がやろうと思うことを1つ決めて、グループで共有しましょう。

## 多文化共生社会

1990年の入管法改正により、主に南米からの日系人が多く日本に住むようになりました。近所や学校、職場に外国籍の方がいるのがあたりまえの状況の中でことばの問題、文化・生活習慣の違いからくるトラブル、子どもたちの教育問題、近年の経済悪化による雇用の問題などさまざまな課題が生じています。そうした課題に取り組む中で目指しているのが、「多文化共生社会」の実現です。この「多文化共生社会」とは、「国籍にも、性別にも、年齢にも、障害の有無にも関わらず、すべての人が暮らしやすい社会」と位置づけられています。愛知県が2008年にまとめた「多文化共生推進プラン」では、愛知がめざす多文化共生社会を「国籍や民族などのちがいにいかかわらず、すべての県民が互いの文化的背景や考え方などを理解し、ともに安心して暮らせ活躍できる地域社会」としています。そうした社会を実現するために、2006年には、総務省から各自治体に向けて「地域における多文化共生推進プラン」が出されました。その中では、特に外国籍住民も暮らしやすい社会を創るために、次のようなことに取り組んでいくと書かれています。

### コミュニケーション支援

多言語による情報提供、相談窓口の設置、日本語学習の支援など

### 生活支援

入居差別の解消、教育にかかる情報提供、進路指導、就業支援、就業環境の改善、外国語対応可能な病院・薬局等の情報提供、医療通訳者の派遣、健康診断・健康相談の実施、高齢者や障害者への対応、災害時の通訳ボランティアの育成、災害時の情報の多言語化など

### 多文化共生の地域づくり

地域住民への啓発、多文化共生の拠点づくり、外国籍住民の地域社会への参画推進など

## 地球的課題(グローバルイシュー)

一国では解決することが難しい、人類共通の課題を「地球的課題」「地球規模の課題」「グローバルイシュー」といいます。大きく分けると4つ。これらの課題は、包括的かつ相互的に関連しています。

### 地球環境

先進国の経済成長などに伴うオゾン層破壊、地球温暖化、酸性雨、砂漠化、海洋汚染、ごみ問題、野生生物の絶滅など地球規模で発生している課題です。

### 貧困と開発

南北問題に伴う貧困、それによる食糧不足、飢餓、衛生面での問題、教育の問題、児童労働など子どもや女性など弱者にかかる問題、持続可能でない開発による環境破壊など。地球規模の構造的な課題なので、途上国だけでは解決できません。

### 平和と安全

核兵器や生物化学兵器など、国境に関係なく被害を及ぼす兵器の根絶、テロの問題、地域紛争の解決と平和維持、児童兵士の問題などです。

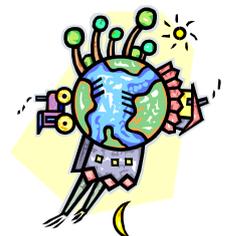
### 人権

民族差別や紛争などにおける難民の問題、貧困と開発のために過剰な労働を強いられる女性や子どもの問題、人間として最低限必要なものさえ保障されない極度の貧困の問題などです。

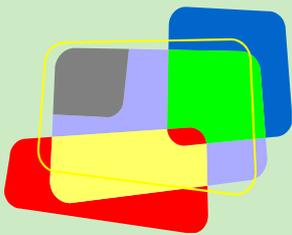
## 地域の課題と地球の課題はつながっている ~「持続可能な」社会を創るため~

地域の課題と地球の課題は別のものと考えてしまいがちですが、だれもが暮らしやすい「持続可能」な社会を創るという意味では共通しています。また、地域の課題を解決していけば地球の課題の解決にもつながりますし、地球の課題を解決しなければ、地域の未来もないのです。

地域の課題も地球の課題も「だれかが解決してくれる」ものではありません。途上国の多くの課題も原因を突き詰めていけば、わたしたちの日常生活につながってきます。わたしたち一人ひとりが地球の一員として、地域の一員として、自分の問題として、解決に向けて取り組んでいかなければ、次世代に課題を持ち越してしまうことになるのです。



# 参 考 资 料



# 目で見えるリビア



1951年に王国として独立、赤黒緑の横三色旗の中央に白い三日月と星というイスラム教国の国旗を制定しました。その後、クーデターで王制を倒したカダフィ大佐が「アラブの統一」を掲げ、エジプトと同じ国旗を採択しましたが、1977年、エジプトのサダト大統領が仇敵イスラエルを訪問したことに反発したカダフィ大佐は一夜にして国旗を現在のものに変更しました。緑は預言者ムハンマドのターバンの色、コートの色ともいわれ、聖なる色、高潔な色とされています。

## ●人口●

 585万人(2005年)(IMF)



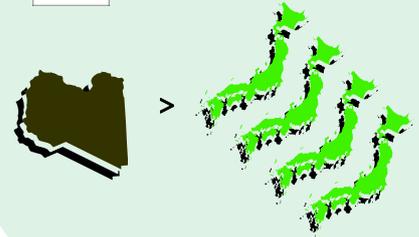
 128百万人



## ●面積●

 1,760,000km<sup>2</sup>  
(日本の約4.6倍)

 377,887km<sup>2</sup>



## ●言語●

アラビア語



## ●宗教●

イスラム教  
(スンニ派)



## ●気候帯●

砂漠気候  
地中海沿岸:地中海性気候



## ●民族●

アラブ人

## ●通貨●

リビア・ディナール(LD)  
100円=1.01LD  
(2007年9月現在)



## ●平均気温●

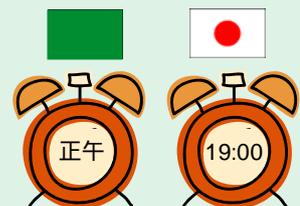


## ●年間降水量●



## ●日本との時差●

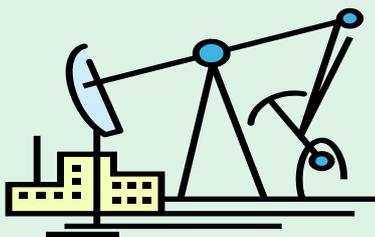
-7時間



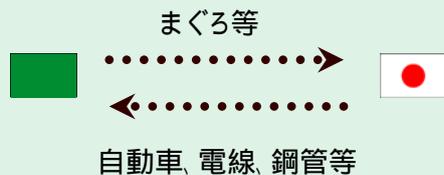
 国旗:『世界の国旗』吹浦忠正監修(Gakken) 人口・面積・首都・民族・通貨:外務省ウェブサイト「各国・地域情勢」 日本の人口:世界子供白書2008(ユニセフ) 日本の面積:総務省統計局「日本の統計」 気候帯・平均気温・年間降水量:外務省ウェブサイト「探検しようみんなの地球」 名古屋の平均気温・年間降水量:気象庁観測部観測課観測統計室「日本気候表」(S46~H12年の平均) 言語・日本との時差:世界の国一覧表(財団法人世界の動き社)

●主要産業●

石油業



●日本との貿易主要品目●



●一人あたりのGNI●

7,380米ドル(2006年世銀)



38,410米ドル(2006年世銀)



●在留邦人数●

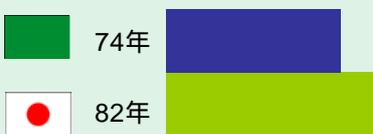
113人(2007年10月現在)



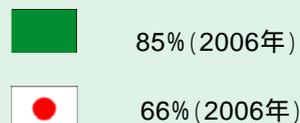
●在日当該国人数●

36人(2006年12月現在)

●出生時の平均余命●



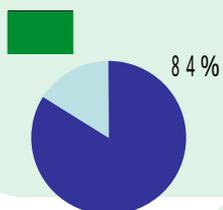
●都市人口の比率●



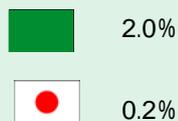
●5歳未満児の死亡者数●  
(出生1000人あたり)



●成人の総識字率●  
(2000~2005年)



●人口増加率●  
(1990~2006年)



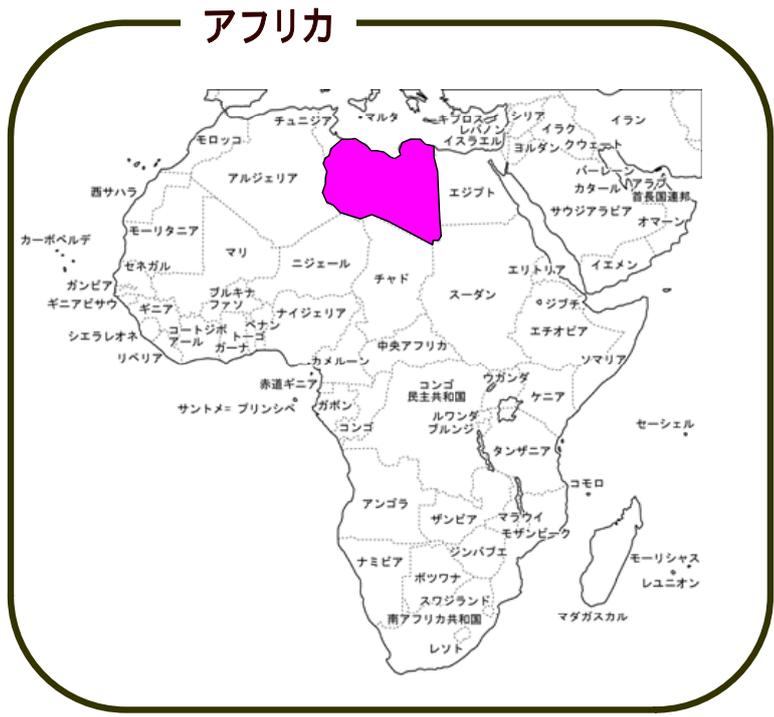
主要産業・日本との貿易主要品目・在留邦人数・在日当該国人数：外務省ウェブサイト「各国・地域情勢」  
一人あたりのGNI・出生時の平均余命・都市人口の比率・5歳未満児の死亡者数・成人の総識字率・人口増加率：  
世界子供白書2008(ユニセフ)

# リビア地図



## アフリカ







## 参考文献・データ等の出典

外務省「各国地域情勢」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/>

外務省「探検しよう! みんなの地球」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sanka/kyouiku/kaihatsu/chikyu/index.html>

総務省統計局「日本の統計」

<http://www.stat.go.jp/data/nihon/index.htm>

財団法人日本ユニセフ協会「世界子供白書2009」

<http://www.unicef.or.jp/library/index.html>

日本リビア友好協会 <http://www.jlfa.gr.jp/index.html>

在リビア日本大使館、総領事館

<http://www.fujiatlasworld.com/business/country/libya.htm>

財団法人中東協力センター JCCME <http://www.jccme.or.jp/japanese/08/08-07-22.cfm>

東京大学 [http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me\\_d13n/database/libya/libya\\_all.html](http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me_d13n/database/libya/libya_all.html)

Youさんの旅行ブログ <http://4travel.jp/traveler/03155/>

Islamic World Photo Album <http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Desert/9573/index.htm>

のこのこ旅の情報ノート <http://www2.wbs.ne.jp/~nokonoko/>

リビア写真館 [http://tabisite.com/gallery\\_af/libya/libya.htm](http://tabisite.com/gallery_af/libya/libya.htm)

『地球の歩き方08～09 リビア』ダイヤモンド・ビッグ社 2008年

『リビア新書』野田正彰、情報センター出版局 1990年

『リビアを知るための60章』塩尻和子 明石書店 2006年

『ジャマヒリヤ 緑の躍進 リビアご紹介』リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリヤ在日大使館広報室

『リビア もうひとつの世界をひらく旅』大石悠二 みずうみ書房 1981年

『リビア物語 世界遺産と大砂漠の旅』滝口鉄夫 論創社 2007年

## ご協力いただいた方たち【敬称略】

野口昌徳

青柳直子

松本和人



## 2008年度教材作成チーム

一宮市

田原市

長久手町

幸田町

扶桑町

特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター

財団法人 愛知県国際交流協会



世界の国を知る  世界の国から学ぶ

## わたしたちの地球と未来

大リビア・アラブ社会主義人民  
ジャマーヒリーヤ国

2009年3月

**発行** 愛知県

**企画  
編集** 財団法人 愛知県国際交流協会  
〒460-0001

名古屋市中区三の丸二丁目6番1号  
あいち国際プラザ

TEL: 052-961-8746 FAX: 052-961-8045

E-mail: koryu@aia.pref.aichi.jp

URL: <http://www2.aia.pref.aichi.jp>

**印刷** サンメッセ株式会社

